城踏 SHIRO FUMI
姫路市立城郭研究室ニュース「城踏」No.26　2001年６月１日
編集・発行；姫路市立城郭研究室
〒670-0012　姫路市本町68-258　日本城郭研究ｾﾝﾀｰ内
TEL 0792-89-4877　FAX 0792-89-4890
URL　http://www.city.himeji.hyogo.jp/jyokakuken/

続・オホーツクの海が見える陣屋

―『御陣屋御造営日記』から―

蝦夷地へ渡った嶋影と鈴木らは、普請の準備に入りました。普請の仕事には請負が入ります。そのため、図面や帳面に建方や必要な資材などを書き上げ、それをもとに普請が順調に進み、完了するのかどうか判断するのが役人の重要な仕事となりました。現代の役所と変わりません。深夜勤務も当たり前のようで、「永々夜勤深更迄も罷在候に付、格別に大坂酒弐升、肴代として銀壱朱被下候事（文久２・10・28）」とあり、酒でも飲まなきゃ、寒くてやってられねぇというところでしょうか。慰労代が出ています。

さて、普請のためには切組がまずは必要不可欠です。それを函館で行うにあたり、工事は「用達」とよばれた御用商人が請け負うことになりました。その商人は、現場で作業する大工を抱えて仕事を進めることになりますが、その前に「用達」は見積書を提出して藩の決定を待ちます。のちに請負うことになる菊池弥三右衛門ら「用達共」は、南部（盛岡領）出身の大工兼松らに現場仕事を請け負わせます。彼らは、兼松が素性確かな者であるということは当然として、建具など必要材料は在庫を抱えているので見積りより減額になる可能性が大きいことも強調します。経費節減は藩にとって申し分ないことですが、極寒地でありかつ北方警備という任務上、本領での普請とは訳が違うので、建物も防寒対策と頑丈な造作が不可欠になる旨、念を押しています。「最初宜敷様申立普請相渡候後、約定の外金子繰出し、手抜等致候義決て在之間敷哉」との記事をみると、安い見積りで請負っておきながら、あとからいろいろと理由をつけては割増を請求するような事例があったのでしょう。ですから役人も具体的な仕様についてチェックをするので、チェックが入ると、例えば「（釘数は）壱間板にて三拾本増の見込に御座候」「（屋根は）手厚に仕壱坪に付柾千五百枚の見込に御座候」などと返答しています。しかし、「用達」にしても大工からの見積を基にしている以上、あとからいろいろと割り増しを請求されるような心配があったのかもしれません。実際、かなりいい加減な見積書だったようで、現場担当者の狼狽ぶりが感じられ記事がみられます。

標津では雪解けとともに実地で作業が始まります。現場には８人分の住居しかなく、赴任して来る人たちの住居不足が懸念されます。幸い、場所人がすでに切組していた長屋１棟を献上するとの申し出がありました。しかし、それを建てる土地の草刈をしてみると予想外に凸凹で平坦にするには手間が掛かりそうだということが判明します。「九六鍬」の者を派遣するよう懇願したのはそのためで、あわせて大工道具を江戸表に注文するよう依頼することも忘れていません。

そんな折、江戸では大きな出来事がありました。藩主松平容保が京都守護職に任命されたのです。その祝いとして家来に振舞がありました（大坂酒、肴、揚玉子、たこ、なす、御吸物、鳥、ねぎ、氷豆腐、鮑、椎茸、麩）。蝦夷地で働く家臣にはどのような祝いがあったのか、記録はありません。しかし現場レベルでは、この吉事を素直に喜べなかったようです。『稽徴録』文久２（1862）年閏８月５日申渡覚に「此度　御大任被為蒙　仰候ニ付てハ、此先御国力ニ不応莫太之御物入被為在候段ハ」とあるように、家中の人的経済的裏付を超越した藩主の大役就任は、藩政を圧迫することが予想されたのです。就任決定にあたり役料としてどこに領地を宛てがわれるかが役所にとっての重大な関心事だったのもそのためです。「後御成箇之儀ハ如何様之御渡方ニ被成候替間敷儀ニ無之儀ニ候条、面々覚悟も可有之儀」―給料支払面で最悪の事態を覚悟せねばならず、藩士の生活に暗い影を落としています。

さて、標津での陣屋建設についてみてみましょう。前述の通り、雪解けとともに作業を始めなくてはなりません。基礎土木工事に「九六鍬」の派遣を求めていましたが、その理由については「雪消より追々土人共漁業に取懸候義故、シャリ、モンベツ両所の土人も帰郷不為致候ては不相成」とあり、春には土人＝アイヌが自分たちの生業につくので、陣屋の土木工事には従事できないためであることがわかります。また、「御陣屋材コタヌカよりホニコイ迄の間は水主を以て成共、海氷過次第運漕不為致候」とあるのをみると、あてにしていた水主たちも、流氷の離岸とともに資材の回漕を開始するので工事どころではない事情があったようです。

春になって実際に作業が始まりました。しかし前述したように、工程がすべてスムーズに進むようには思えません。

尚又当月廿三、四日両日大工共木挽共に相休候に付吟味致候処、三月中勘定に可相成作料御渡無御座由申出候に付、（中略）又々此節木材差支、大工共手明に相成居候に付、箱館表木材無之哉と棟梁共吟味致候処、此節木材の義は多分御座候得共、金配甚差支調義可致様無御座候
（文久３・４）

元請けともいうべき「用達」らの資金繰りが悪化していることが窺えます。必要な金や資材の供給がない大工らは、「無拠此節大工共建具師と罷成稼居候」という有り様で、彼らを「漸申諭」しながら仕事をさせようとする役人の様子が目に浮かんできます。もっとも、資金繰り悪化の原因ははっきり記載されていませんが、『稽徴録』の記事を参考にするならば、藩側が十分な資金を「用達」に渡していないことや物価高騰による出費増大などが考えられます（この頃五稜郭建設も行われている）。

函館における切組は、５月中にはほぼ完了したようです。それらの部材及び人間は、標津まで回漕される手はずです。しかし、帰りの船は空荷で帰帆することになるので運賃は高めになるといいます。こうしたことも出費増の要因のようです。

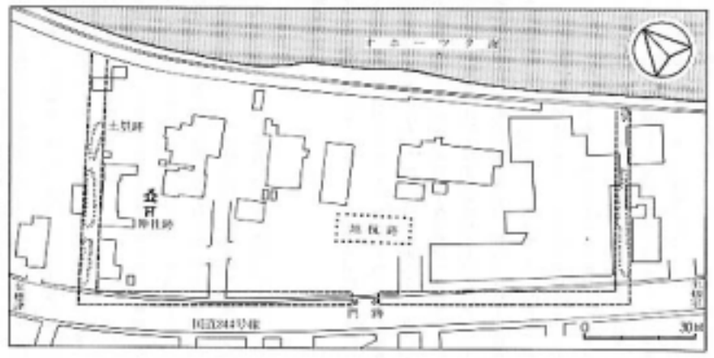
標津へは４月17日に最初の船が函館を出港し、以後８月28日まで11隻の船で物資や人員を運びました。この年、計17棟を建てる予定でしたが、上記の11隻で運ばれたのは10棟分に過ぎません。「当年六棟御取建、残拾壱棟後年へ相延候ては、何程増金に相成候哉」と「用達」へ尋ねていることから、計画変更のあったことがわかります。この時、組み上げされない分は、現地に囲い込んでおくことになったものの、始末が悪く雨露に曝されていました（文久３・７）。恐らくこの年、６棟は建てられ、現地派遣の役人が執務をする陣屋と宿舎、倉庫など必要最低限の施設は整ったのでしょう。

標津場所については、本ニュースNo.24で紹介したような番屋や櫓があったことがわかっています。それに比べ陣屋の遺構についてははっきりしていません。1999年夏、現地を訪れましたがわかりませんでした。一説には下記のような土塁遺構がかつて残っており、そこがホニコイの会津藩陣屋とみられていたようですが、試掘調査したものの、それを裏付ける証拠は出土していないようです。

この『日記』の性格上、軍装について記事はありません。当初計画では火薬庫や武器庫を建てる予定があったようですが、17棟の内にはそうした施設が含まれていたようにはみえず、どれほど実効性をもたせた陣屋建設であったのか、疑わざるを得ません。

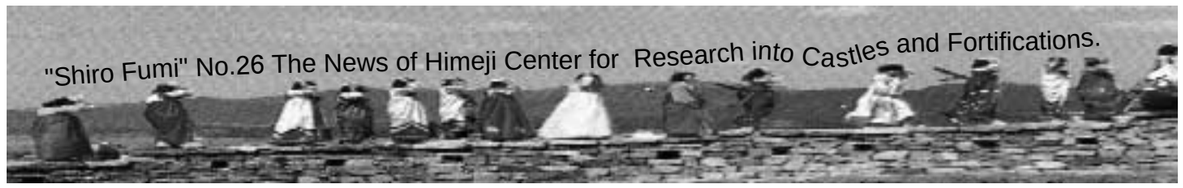
文久３年12月１日、鈴木は標津を出発し、翌年正月２日戸切地陣屋へ到着しました。『日記』はそこで終わり、陣屋がどこまで整備されたかは不明です。

慶応４（1868）年、会津藩が官軍に降伏すると、オホーツクを臨む陣屋はその短い役目を終えることになりました。地元には会津藩士の墓が残っています。



陣屋跡とみられる場所

図中央の「地杭跡」は、『日記』で嶋影・鈴木両名が藩役所に問合せた「根杭」か？

彼らによれば、地面が凍りつく為、柱石の上に建てると建物が歪み、戸建具の開閉ができなくなるという。これでは安政の大地震の時のように、災害時に外に逃げ出せず危険だという。柱石に替えて「根杭」を打ってもよいかどうかを確認した。戸切地陣屋での実績を実例に挙げて説明している（文久３・３・８）。仕様とは異なるが、経験から現場で変更することにしたのだろう。

参考、図版：『蝦夷地御領分シベツ表ホニコイ御陣屋御造営日記』標津町郷土研究会、1987